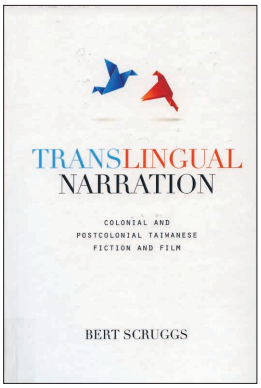
書評

バート・スクラッグス『トランスリンガル・ナレーション——（ポスト）コロニアル台湾の小説と映画』

Bert Scruggs, *Translingual Narration: Colonial and Postcolonial Taiwanese Fiction and Film*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2015.

フェイ・阮（ユアン）・クリーマン



本書は日本統治期における台湾の小説及び（近年植民地時代を舞台として製作された）映画をポストコロニアルの視点から読み直す研究である。二十一世紀に入り、台湾の植民地時代の文学に関する研究においてポストコロニアルあるいはトランスナショナルの理論を介入して論議を試みるものが少なくない。韓国や香港とともに、植民地支配の影とその後遺症は今日でもしばしば文学、映画、ないし一般言説（public discourse）に現れていてアジア学の研究者の注目を集めている。

過去半世紀以来、「台湾」という研究の現場はさまざまな変化を経てきた。二十世紀の一九五〇年代冷戦期には中国本土へのアクセスが極めて制限されていたせいで、欧米の研究者は台湾を中国の「代役」として伝統中国社会を理解する場と見ていた。七〇年代と八〇年代に入ると、台湾は経済高速成長のモデル「アジアの四つのドラゴン」（the four dragons of Asia）の一員である経済発展国として研究対象となった。西洋の資本主義と儒教の倫理を合流してアジアの新しい経済容相を転換する一好例とされた。

一九八七年に戒厳令が解除され、加速する民主化運動は人権や自由選挙などをもたらしただけではなく、台湾ナショナリズムも台頭させるのである。九〇年代に興起する植民地研究やポスト・コロニアルリズムとトランスナショナル理論にも影響され、半世紀にわたる日本帝国統治期についての考察が正式に幕をあけた。二十一世紀に入ってから、英語圏でも、台湾植民地時代の複雑に

錯綜する同化種族政策、言語・文化アイデンティティ、文学生産、あるいは東アジアにおける帝国文化のトランスリージョナル（跨地域的）な流通などについて、いくつかの書物が出ている（Leo Ching 2001; Faye Kleeman 2003, Karen Thornber 2009, Kimberly Kono 2010）。それまでの政治経済ないし軍事歴史に集中する日本植民地研究と一転して、文学や文化に脚光を浴びさせたのである。植民地体験をよりマイクロ的に、その体験がいかにひとりひとりの個人に影響を与えたかを考察するまでに進化した。スクラッグス氏の『トランスリンガル・ナレーション』はこの意味で重要な意義をもつ。しかし、今までの日本植民地文化研究の書物と一風違うのは、この本が文化や文学生産を植民地の時空においてとらえる歴史的な調査ではないということだ。どちらかといえばポストコロニアルの視点からコロニアル時期のテクストを検証するという方法をとる。

本書は冷戦期終結後、特に戒厳法が解除されたあと、植民期に日本語で書かれた文学作品が活発に中国語に訳される現象を焦点にする。いま年々衰えていく台湾の日本語世代と異なり、戦後生まれ世代、またそのあとに生まれた新しい世代の植民地時代への認識はこういう翻訳作品に通じてこそ成り立つのである、とスクラッグスは言う。よって本書は、原作の作者、創作意図、その時代における各作品の意味などよりも、翻訳過程にたずさわる翻訳者・媒介者（mediator）と、この言語転換作業に生まれた間テクスト（intertextual）のずれの問題に目を向ける。この意味で、作者は今までの定説を逆転して「コロニアルはポストコロニアルによって生成する」（p. 9）と敢言したわけである。はたしてどちらがどちらを生成するということには異議があるかもしれないが、コロニアルとポストコロニアルの境界がいっそう曖昧となる点を強調する作者の意志が明らかである。

このように過去の植民地経験の再構築を検証するために、スクラッグスは構造言語学、ディスコース分析、マルクス主義、フェミニズム、心理分析という五つの方法論ごとにそれぞれ章を展開していく。本書は六章からなり、第一章は本書全体の要旨の紹介にあたる。ここでスクラッグスは、本書の目的は日本帝国についての研究でも過去の植民地としての台湾や台湾人の生活や思想を文学作品に通して再発見することでもないと述べる。そのかわり、台湾の植民地的アイデンティティがポストコロニアル翻訳者と批評家によって体現される一方、それぞれの翻訳者と批評家が現在自分のアイデンティティを植民地期文学に投影することの過程を追跡していくのである。

第二章は「一つの文化、二つの国」と題して、植民地期の言語政策、台湾における戦前・戦後の複雑な民族、言語環境を説明する。近代台湾人が清朝皇帝の臣民として生まれ、日本天皇の臣民

として死ぬ。あるいは日本天皇の臣民として生まれ、中（華民）国の国民として死ぬ――スクラッグスは台湾人が直面したこの「一つの体、二つの国」というねじれを指摘し、日本語文学を中国語訳することによって、そういった作品に第二の生命（second life）を与えられると語った（p. 22）。日本語で書かれた台湾文学、国家のない国民文学（ナショナル）としての台湾文学をいかに読解するかの問いをなげかけ、ハイブリッド、複声（multi-voiced）などの概念で解いていく手順をとった。

第三章は植民地期の主要な作家、翁鬧、吳濁流、そして王昶雄を取り上げ、作中人物である「在日台湾人」の曖昧性に作家たちの運命をだぶらせる。台湾アイデンティティの境界線は場所（location）とある特定の土地（local）の掛け合いのなかでこそ成立できたともいう。第四章はスクラッグスの専門研究対象である作家楊逵と小林多喜二と比較しながら、階級意識、文学虚構空間との関係を検証し、トランスナショナルな植民地プロレタリアリズムの可能性をさぐる。

第五章は女性作家と女性の社会的役割、身体の政治性について論を展開する。張碧華、葉陶（上述楊逵の妻）、黄寶桃、楊千鶴という四人のあまり知られていない女性作家とその作品にそれぞれ一セクションずつ与えて論じていく。そのなかで台湾の評論家の研究を引用しながら、台湾の女性作家研究に見られるいくつかの欠陥を指摘した。スラッグスによれば、第三世界作家を論じる際、少数の作家をあたかも第三世界の国家、文化全体の代弁者とするというフレドリック・ジェイムソンへの批判は、台湾の女性作家研究と批評にも適用できるという。特定の植民地期の女性作家が台湾における全女性の植民地体験を代表するというような勘違いが頻繁に起こり、そのゆえ、彼女らの作品を論ずる際、おもにジェンダーに光を当て、肝心な文学芸術性を後景に退けてしまうようにも思われる。植民地期台湾における女性作家について、いまだに系統的に整理かつ研究されていないことは疑いえない事実であろう。この章は日本と台湾の植民地文学研究という分野にジェンダーに関する新しい視野を広めるひとつのきっかけになることがおおいに期待できると思われる。

本書には「（ポスト）コロニアル台湾の小説と映画」という副題がついているが、ここまでの各章はおもに文学作品を中心にし、映画については言及していても詳細に分析はされていない。その点、終章の第六章は台湾における植民地期ノスタルジアとソラスタルジア（solastalgia）という二つの手かがりをたどりながら、最近の台湾映画でどのようにそれらの概念が表す感情が表現されたかを注目するのである。ノスタルジアは周知の概念であったが、ソラスタルジアは比較的新しい造語といえよう。ソラスタルジアはもともとは環境生態学の用語で、オーストラリアの環境哲学者グ

リーン・アールブレケット（Glen Albrecht, 1953- ）が提案した新語である。故郷を離れてホームシックによって鬱病や悩みを経験するというノスタルジアに対し、ソラスタルジアは自分の故郷（あるいは我が家）に居ながら郷愁を感じ、悩まされ、病気にさえなる状況をさす。アールブレケット氏は、それは個人にまつわる環境の激変のゆえに発生すると述べる（氏はオーストラリアのニュー・サウス・ウェールス［NSW］地域に起こった旱魃（かんばつ）や大規模な露天掘りによって地域の人々がこうむる生理的苦痛と無力感を例としてあげる）。

一九八七年に戒厳令が解除された時点から、それまで政治的な理由で製作できなかった台湾史と「台湾意識」（台湾人としてのナショナル・アイデンティティ）を展現する映画がたくさんでてきた。スクラッグスは、それぞれの映画は植民地期の記憶を新たな形式で詮索し美的に表現しようとする表れであると主張する。たとえば候孝賢（ホウシャオシエン）監督の『悲情城市』を先頭に立ち、二〇〇八年台湾映画興行収入最高記録を達した魏徳聖（ウェイダーション）監督の『海角七号――君想う、国境の南』と同年台湾で初めて客家語で作られた『１８９５』、あるいは嘉義農林学校の日本人、漢人、原住民の野球選手たちが甲子園へ行くいきさつを物語る『KANO 1931――海の向こうの甲子園』（二〇一四）はみなポストコロニアルを介してコロニアルを再構築する好例であろう。現在の台湾映画に見られるノスタルジアとソラスタルジアは、結局、時間的（temporal）および空間的（locative）な要素が両方入っていることが示される。

また、それぞれの映画には日本語、台湾語、客家語、原住民部落のことばなどが混じり合うきわめて特殊な多言語環境を映像化することによって多民族・多元文化の状況が語られる。多くの観客は、たとえその多数のことばのなかの一つや二つが分かっていてもほかの言語は翻訳字幕に頼らずにはいられない。それゆえ、同じ台湾人でも映画鑑賞の聴覚経験はかならずしも単一な体験ではない。ここで、スクラッグスが本書の題名を『トランスリンガル・ナレーション』（越境する言葉での語り）と名付けた意図がいっそうはっきりとなるのである。

『トランスリンガル・ナレーション』はただのテクスト分析にとどまらず、日本語と、その後中国語という二つのスーパーランゲージの狭間で、正式な書き言葉のシステムをもたない台湾語による台湾文学の生産・翻訳・鑑賞の実況を明快に語る。そしてコロニアルとポストコロニアルの境目をぼやけさせ、相互相生のダイナミックを鋭利な分析によって浮かび上がらせた。この意味で本書が日本と台湾植民地期の文学と映画研究、ポストコロニアル研究、そして日本語文学研究などそれぞれの分野に大きく貢献することを、書評者は確信している。